付７話　個性的な博士課程の院生

今回は、当時の松岡研の博士課程院生６人の研究や個性についてお話しする。話題がコンピュータから少し離れるが許されたい。彼ら６人は、日ごろの研究や生活状況は個性的で、大変面白い。「これはちょっと失礼」。自分が進学したとき、博士課程３年次が１名、同２年次が４名、１年次が１名であった。現在は１人を除いて現役を退いているが、３名は大学の教授、１名は建研、１名はスーパーゼネコンの研究所に就職し、最後の１名は中部地方で随一の構造事務所を経営している。

大学院時代の５年間は自分の研究と学習、バイトで忙しかった。それでも先輩や同期生との生活はそれなりに楽しく、夜遊びも食事も一緒に出かけた。そんな折、博士課程６人の人間観察は面白い。人間多少なりとも他人と違うところがあるが、この人たちは、頭脳明晰、学力優秀のみならず、人間性や生活態度が他の人たちとかけ離れ、個性豊かである。

K 氏は名大建築学科１期生、最初の博士課程の学生である。当時も今も変わらず、上昇志向の非常に強い人である。組織内で出世したい人は、押しと引きが大切であると良く言われる。これまで私があった多くの老先生は、研究も立派でしかも謙虚であると彼を評価する。学生時代も同じで、松岡先生を始め、他の教授陣に好印象を与えていた。特に松岡先生には。一方、他の博士課程の学生はかなり辛辣な評価を与えていた。「彼の研究には独創性がない」、「アイディアはどこか他の人のコピーである」と言う。Y さんからは「彼の前で研究上の思い付きや結果、アイディアを話してはいけない。盗まれるから」と言われたが、言葉の意味が良く理解できなかった。後日、あるアイディアを思い付き、K 氏に自慢した。数日後、「こんなアイディアを思い付き、こんなことができる」と告げられた。「それって自分が前に言ったでしょ」。話が延々と続き、悪気はない。もう全て自分の言葉で喋り、最後に、「これで研究領域が広がった」といった。Y さんに言われたことはこれかと呆れた。

N 氏も名大建築学科１期生であるが、学年は２年次である。一度は企業に就職したが、直ぐに辞めて大学に戻った。口の悪い学生たちは裏で「出戻り」と称していた。顔つきや話し方が若さを感じさせず何となく年寄り臭い。N 氏以外の院生は少年のようで言動もストレート、無邪気に他人の悪口を言う。K 氏や他の院生に対し、親しみを込めてか「さん」付けがなく、ただひとり浮いていた。研究課題は、耐震問題で、確か「地盤を考慮した２棟建物の連成振動」であったと思う。あまり親しくなか

ったので詳しくは分からない。性格や人間性は、他の院生に比較するとそれほど個性的ではなく、普通人であまり覚えていない。

HM 氏は建築学科 2 期生、高校は K 氏と同じ名門旭丘高校である。K 氏に対するライバル意識が非常に強い。少し背が低く小太り、お腹を少し突き出し、斜め下より大きな目で睨む。私みたいにできの悪い学生は相手にせず、もっぱら K 氏や同輩に対し研究上の皮肉を言う。彼のあだ名は、誰が付けたか知らないが「廊下トンビ」。教授陣の研究室が並ぶ廊下をウロウロ。教授陣の覚えもめでたい。いつからか覚えていないが、松岡先生の部屋に研究室を移したという。本人の研究領域は耐震工学であるが、その内容は良く分からない。エルゴード性とか不規則振動などの単語を聞いた覚えがある。相手の分からない言葉を連呼して煙に巻くのは彼の得意技である。頭の良い彼は国家試験を受けて、建研に就職した。

TY 氏も建築学科 2 期生、人の好いお坊ちゃんである。研究室にはわずかしか来ない。「天才は忘れた頃にやってくる」私が彼に付けた名称。ひたすら、実家にこもり研究を続けている。夏祭りの花火大会に招待され、他の院生と共に彼の家に行った。大きな家で玄関から籐がひき詰めてあった。庭に突き出た彼の部屋には学ぶ環境が全て整っている。これでは大学に来る必要はないと思った。彼の研究は、I 氏と同様、一般化された連続体力学であり、コセラ(Cosserat)理論と呼ばれている。説明されたが難しくて良く分からない。

Y さんはただ一人の女性、お局様として年下の男性を可愛がる。ただ、松岡先生の前では小娘のように振る舞う。そのギャップがとても面白い。彼女と I 氏は他大学からの進学者であり、私にとっていい意味で癒される。研究内容は耐震工学であったが、松岡先生の研究対象に合わせて「等方弾性体の内部加振」に変更した。彼女の面白い話は多数あるが、また今度にしよう。

I 氏は育ちも良く、性格も素直、顔もスマートなので人に好かれる。ただ女性に弱いのが玉に瑕。学科に事務職の女性が赴任した。夏休みを終えて大学に戻ると彼女がいない。I 氏に聞くと彼の部屋にいるという。驚いたが、その後も何人か、女性が変わった。彼とは今でも付き合いがあり、SPACE の開発に人的・経済的支援を受けた。後年になってから、経営者として人のいやがることも明確にものを言うようになった。

彼と K 氏については、付き合いが長いのでまたお話しする機会があると思う。このように個性豊かで、頭脳明晰な人と付き合うのは苦労する。もし組織内にいるときは離れるか、近づき過ぎないのが無難である。